



中沢新一  
人類学者。1950年山梨県生まれ。  
明治大学野生の科学研究所所長、  
多摩美術大学芸術人類学研究所所長

## 民藝は私たちに何をもたらすか？ 中沢新一×鞍田崇

いま、民藝という「灯台」が照らし出すものを見据える



鞍田崇  
哲学者。1970年兵庫県生まれ。  
総合地球環境学研究所（地球研）特  
任准教授

### ■民藝をバラフレーズする

鞍田——今は広い意味で民藝というのがブームになっていて、綺麗でお洒落な見せ方をした書籍や雑誌も色々出てはいるんですが、どうも「カタログ」的な集積にとどまってしまっていて、それらを通底する言葉にまで届かないもどかしさがあるんですね。柳宗悦が民藝に表したものは、単なる骨董とか趣味の問題ではなくて、ひとつの社会の問題でもあるし、さらには、例えば自然の問題でもあるし……。結局、最終的には美に凝縮されていくわけですが、彼が民藝という言葉に託したものを僕らなりにバラフレーズしていく必要があるのかなと思います。

中沢——そうですね。特に「3・11」以降、日本人が向かっていかなくはならない世界で、柳宗悦と民藝というのはひとつの灯台になるんじゃないかと思っています。時代的な制約もあるし、美ということにつきまとう危険性とか色んな問題があるにしても、民藝というコンセプトはこれからとても大事になっていくだろうと思うんです。色んな意味があると思うんですよ、「3・11」以後で見えてきたものというのがあって。まずひとつに、日本人が東北というのを再発見したというのは大きいですね。

鞍田——今回の震災を受けて、中沢さんが農業の話を抑っていたのには膝を打つような思いがしました。

中沢——三陸の漁師たちが、自分たちの海や漁に対する考え方をテレビカメラに向かってストレ―

「3・11」以降、日本人の向かうべき世界において、柳宗悦と民藝というのは

ひとつの灯台になるんじゃないかと思っています。——中沢

トに喋っていたんですね。何日間も。あれは非常に面白かったです。それから福島のお百姓さんたちが、土や植物、人間がそこで作り上げてきた世界に踏み込めなくなってしまったことの苦しみや怒りを語っていたりね。柳田國男さんが見ていたら常民の思想が生で語られているなど言ったと思います。あんな風に一次産業の人の思いがメディアを通して日本人の耳に届いたことは滅多になかったと思うんです。

しかも政府がこの状態でしょう。国家機構が機能していないんですね。実際には地方の小さな首長たちを中心とする自治体が動いている。政府・国家機構というのは、実を言うところなものでいいんですよ。これからは地域主権が大きくなっていきますよ。地域と具体的な土地と人間の関わり。産業で言うところと一次産業ですよ。これが日本人の作り上げるべき世界の根幹にあるということがはつきり見えてきたんじゃないかと思います。

鞍田——僕は専門は哲学ですけども、研究所の仕事で地方の調査に同行したりすると、山が荒れ放題な姿を目の当たりにします。八割が山の国なのに結局その八割のストックを活かしきらずに、二割の狭い平野で動いている。フローのお金で右往左往している状況の馬鹿馬鹿

しさを感じます。

中沢——しかもそこに原発五四基ですよ。ありえないです。この馬鹿馬鹿しい思考方法というのはこれから解体すべきものなんだと思うんです。柳さんがやったことと同じような戦い方を、僕らもやらなきゃいけないと思うんですよ。柳さんがあの時代に自分の戦いの主題にしたものというのは、全く間違っていないんじゃないですかね。僕がやったことだって後の時代に必要だったらきつと批判されると思うんですよ。限界性を持っていますから。それでもいいんじゃないですか。そんなことは恐れるべきことではないと思うしね。

#### ■民藝の原理を抽出する

鞍田——ひとつ大きな背景をなしている問題としては経済ですかね。柳も「用の美」をとなえる時に「用」と「利」というのは違うんだ」としきりに言うんですよ。利というのは例えば機械生産されたものに対して使っている言葉です。経済が絡むことによって、本来「用の美」として機能性を与えられているはずのものも、彼の言葉に倣うと不健全な形で表出してしまふ。柳は正面から経済論を語ることはしませんが、経済というものに対してある種のアレルギーを持っている気がする。その辺りが、柳が直面した当時の状況と、僕らの今の状況と、大きな共通点だと思います。

中沢——今は柳さんの頃よりも金融資本主義というものが発達していて、それがインターネットに

よってグローバル化している時代なんです。今は経済というとお金をフローらせていく部分だけが取り上げられるわけですけども、実は経済というのはいくらと広大な領域が支えているんです。一次産業というのもその一部なんです。生産業もそうです。

その究極の根底は何かというと人間なんです。人間という生命体は、ものを食べて生命を維持して、脳で考えるんですね。この脳は不思議なことに想像力というものを持っていて、無から何かを作り出す力がある。民藝というのもマーケットと流行の問題が大きいわけですから経済の問題と深く関わっている。民藝がコマージュと結びついているから駄目だとか、そういう発想は間違っていると思います。まずは「民藝ってなんなのか」という原理的なものを抽出する必要がある。それはどこへ行っても応用可能な自分の能力を発揮する原理なんじゃないかと僕は思う。ウォール街でも、大学でも、クラブの工房でも発揮できる原理。柳さんはそれを発見しようとしてたんじゃないですか。ハイデガーもそうだと思います。ハイデガーが存在と言っているものと柳さんが美と言っているものは大体同じものなんです。

鞍田——僕は一方で美というものの限界を感じるからなんですけど、民藝の原理というのにはある種の「愛おしさ」かなという気がするんです。生き様に対して、あるいは自分の暮らしに対してでもいいんですが。

中沢——もっとハードコアに考えていいんじゃないかと思うんです。例えばメルロ＝ポンティは、それは構造として「キアスム」だと思うんですよ。キアスムというのはメルロ＝ポンティが最晩年に問題にし始めた概念で、元々はポール＝ヴァレリーから来ているんですけども、世界と人間の関わりについて「交差」という概念で表すんですね。この交差という概念はものすごく起爆力があって、芸術的なクリエーションや愛おしさもキアスムに入る。例えば何か愛おしいものを感じた時、それは私の心とその人の心の間にキアスムが発生していないと生まれません。色々なものが切断されていると愛おしさも思いやりも発生しません。それはキアスムが破壊されてしまっている状態です。キアスムというのは容易に破壊されるんです。一番破壊されるのは言語と貨幣というもので、簡単に破壊されちゃうんですけれども、ただ修復も可能なんです。人間の脳がキアスム構造を持っているからすぐに回復できる。

民藝というのはたぶん、あらゆる道具の中のキアスム構造のことを指しているんじゃないかと思うんです。このキアスムから離れちゃうと、貴族の玩弄物、見るものになってしまう。あるいは機械生産のただ使うものになってきますよね。

民藝の原理というのは

生き様に対して、あるいは自分の暮らしに対してのある種の「愛おしさ」かなと思います。——鞍田